

ナチス時代のドイツのバプテスト教会 (2)

(ギュンター・バルダース)

片 山 寛 (翻訳)

昨年度の『神学論集』に、ギュンター・バルダースの論文「ドイツ・バプテスト小史」から、その第5章「第三帝国と第二次世界大戦の時代」の前半を、「ナチス時代のドイツのバプテスト教会 (1)」と題して掲載したが、これはその後半である。書誌的情報は昨年記したので、ここでは繰り返さない。

8. 福音主義自由教会同盟への合併

1942年10月30日以降、ドイツにはもはや「バプテスト教会」は存在しない。人はここで見出しの「合併」という文字に注意せよ。「バプテスト教会同盟」Bund der Baptistengemeinden は、第三帝国において結局のところ禁止されたわけではなかったのだ。むしろ同盟は、別の自由教会の同盟とともに、「福音主義自由教会同盟」Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden へと合併を決めたのである。それは1941年2月22日の、第30回同盟総会でのことであった。同盟規約の改正のために必要だった国家の監督官庁の合併承認が、1942年10月まで実現しなかったという事実は、この合併が、ナチ国家によって要求されたわけでも、促進されたわけでもなかったことを証明する。にもかかわらずこの合併は、人間的な判断からするならば、これ以外の時期に成立することはなかったと思える。どうしてこの時期だったのだろうか。「外的強制と内的動機」が一致したのである。規定改正案に参加した人々の一人、ハンス・ルッキー¹⁾が、

1) 〔訳註〕 Hans Luckey 1900-1976 は、1920年から23年まで Predigerseminar で学んだ後、牧師をしながら学び続け、哲学と神学の博士号を取得した。1929年からは Predigerseminar の教師に迎えられ、40年間、そこで組織神学を中心に教えた。同時に彼はドイツ・バプテストの草創期の人々、Johann Gerhard Oncken 1800-1884 や Gottfried Wilhelm Lehmann 1799-1882 の伝記を書き、バプテストの歴史研究の基を築いた。cf. *Ein Herr*, S. 351.

経過を語っている。議論の様子を、彼は次のように表現した。「狼が羊の群れの周りをうろついている時には、羊は固まるものである」²⁾と。

外的な圧力が、1933年にヒトラー政権が誕生してすぐに、福音主義的な自由教会の協約においてゆるやかに結ばれていた諸グループに、合併する可能性を考えさせるきっかけになったのである。ナチスの均制化 Gleichschaltung³⁾への不安、つまりもしかすると国家によって「ドイツ福音主義教会」DEK に編入を命じられるかもしれないという不安が、ドイツ自由教会を設立する願望を呼び起こした。しかし、すでに触れたように、間もなく明らかになったことは、この当初はもっともな理由のあった心配は、事態の展開の中で杞憂に変わったということである。なぜなら、国家社会主義者の教会政治は、DEK を完全に均制化しようという試みが挫折してからは、この路線をさらに追求することを考えなかったのである。彼らはむしろ、すでに述べたように、「無害な」自由教会を、教会の望ましき崩壊プロセスを強く促進するために利用したのである。また〔DEK 内の〕ルター派教会も、改革派教会も、(プロイセン) 合同教会も、「DEK による自由教会の吸収」⁴⁾に賛同する準備がなかった。それは何よりも、「信仰告白の違い」が理由であった(カール・バルトは、自由教会の告白は「非宗教改革的な起源の」信仰告白だ、とまで述べている!)⁵⁾。

1934年のドイツ・バプテスト教会の百年記念祭およびバプテスト世界大会は、いやが上にもバプテストの教派的同一性を強化したのだが、このことが自由教会のより大きな全体を目指すという関心をただちに強めたわけではなかった。国際的結びつきはここで明瞭になったものの、それは全く異なった構造を有す

2) Hans Luckey: Äußerer Zwang und innere Motive, *Die Gemeinde* 1960, Nr. 3f, Nachdruck aus *Ökumenische Rundschau* 1959, S. 175-184, ここでは以下の表題である。War der Zusammenschluß dreier taufgesinnter Gruppen im Jahr 1941 ein Modellfall für kirchliche Einigung? (三つの洗礼志向のグループが1941年に合併したのは、教会的合同のモデルケースか?)。以下も参照。Willi Riemenschneider: Der Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden. Bericht über seine Entwicklung, *Die Gemeinde* 1974, Nr. 32f.; Günter Balders: 15 Thesen zur Entstehung des Bundes ..., *Theologisches Gespräche* 5-6, 1979, S. 14-16.

3) 〔訳註〕均制化 Gleichschaltung とは、ナチスの国家理念によって、ドイツのあらゆる社会集団を染め上げる政策である。「強制的同質化」とも呼ばれる。日本でも1941年、プロテスタント系33教派が政府の圧力で「日本基督教団」に合同させられた。

4) Aktennotiz Schöffel (Armin Boyens: *Kirchenkampf und Ökumene 1933-1939. Darstellung und Dokumentation*, München 1969, S. 104. 354f.)

5) Bei Wilhelm Niemöller: Einheit und Gemeinschaft, zit. nach Karl Heinz Voigt, *Die Methodistenkirche im Dritten Reich*, Stuttgart 1980, S. 17.

るメソジストの世界教会と比べると小さかったし、それはむしろ、自由教会 Freikirche と教会 Kirche の違いを際立たせることになった様々な理由の一つであった。しかも国際的結びつきは同時にひとつの危険の可能性を含んでいた。なぜなら、ゲシュタポは「教派こそ…その国際的な結合のゆえに…ドイツの外交上の敵どもの有力な予備軍を意味している」ことを確認していたからである⁶⁾。

1937年初めのナチ宗教政策の徹底的に反教會的な措置は、自由教会統一を求めるそれまで柵上げになっていた問いを再び呼び起こした。しかもそれは或る内的な精神的動機と結びついていたのである。1937年4月初めのバプテスト説教者兄弟会の「神学週間」⁷⁾の席上で、祈りのグループの一つにおいて、キリストによって望まれキリストに基盤を置いた信仰者の統一に近づくために、「兄弟を探し求めよう」との要望が掲げられた。そこで実際に、パウル・シュミットとフリードリヒ・ロックシースが、ヴッパータールの「キリスト教教会」Christliche Versammlung のエルンスト・ブロックハウスとその他有力者たち、またヴィッテンの「自由福音教会」Freie evangelische Gemeinde⁸⁾の指導的な兄弟たちを訪問した。

この最初の接触は、1937年4月28日の新聞報道で、「キリスト教教会」の禁止が「晴天の霹靂のように」襲ってきて、次の日曜日に「兄弟たち」が閉ざされ封印されたドアの前に立ちつくしたときに、全く新しい次元を迎えることになった。この禁止は数多くの別の似たような禁止命令⁹⁾と関連し合っていた。幾人かの「指導的な兄弟たち」は直ちに禁止の根拠を探そうと試み、またすで

6) Heinz Boberach: *Berichte des SD und der Gestapo über Kirchen und Kirchenvolk in Deutschland 1934-1944*, Mainz 1971, S. 361.

7) 〔訳註〕説教者兄弟会はバプテストの牧師会であり、「神学週間」はその研修会。

8) 〔訳註〕ヴッパータールに本拠地を持つこの教団は「キリスト教教会」Christliche Versammlung と名乗っていた。教職制をとらない兄弟団（同胞）運動 Brüderbewegung つまり Plymouth Brethren の流れを汲む人々である。

9) Heinzpeter Hempelmann の学術論文 *Das Verbot der »Christlichen Versammlung« 1937* (Hausarbeit für das theol. Fakultätsexamen, Tübingen 1982) の他に、「兄弟団」のサークルから次のように多くの文章が出版されている。Joachim Zeiger: *Die Suche nach der Einheit der Ekklesia Gottes, Die Gemeinde*, 1977, Nr. 16; Dieter Boddenberg, Hans Platte: *Versammlungen der »Brüder«. Bibelverständnis und Lehre, mit einer Dokumentation der Geschichte von 1937-1950*, Dillenburg o. J.; Fridhelm Menk: *»Brüder« unter dem Hakenkreuz. Das Verbot der »Christlichen Versammlungen« 1937*, o. O. 1980; Klaus Bloedhorn jr.: *Untertan der Obrigkeit? Baptisten- und Brüdergemeinden 1933-1950*, Witten, 1982. きわめて数多くの、叙述されるべき時代そのものに由来する冊子は、安易な立場をとることを許さない。K. Zehrer: *Die Freikirchen und das »Dritte Reich«*, S. 427-430 はきわめて不十分であり、部分的には間違っている。

に4月13日になされた解散命令が廃止されているのではないかと探したが、両方とも無駄だった。――バプテストの同盟事務局の反応は素早く独自のものだった。彼らは同盟の各個教会に5月7付けで書簡を送り、「集会」のメンバーの受け入れを控えるように、そして禁止されたグループの仮避難所と当局から見なされるのを回避するように求めた。

4月28日にベルリンに急いだE・ブロックハウス、H・ハルトナックと彼らの法律顧問F・リヒター博士よりも「上首尾」だったのは、ハンス・ベッカー博士¹⁰⁾だった。彼は兄弟たちの要請にこたえる決心をして、同じくベルリンに行つて情報を入手した。彼は、経済界では指導的人間だったのだが、粘り強い交渉の結果、彼の個人的責任において一つの組織を設立する許可を得たのである。それは、国家に忠誠を誓う集会に集うキリスト者が、新しい基盤に立って集会を行うことを可能にするものであった。1937年5月23日に、ゲシュタポの係官の臨席のもとに（従つて自由な発言は不可能だった）ドルトムントで「**自由教会的キリスト者同盟**」 *Bund freikirchlicher Christen* (BfC) が設立された。この同盟には、文書による個人的表明を通してのみ入会することができた。ゲシュタポに与えられた条件によって間接的に、いったいどのような理由から「キリスト教集会」が禁じられたのかがわかる。ゲシュタポが要求したのは（ハンス・ベッカーによれば）、「われわれが明瞭で透明な組織を作り、国家に有害な企てを、キリスト教をかくれみのにして秘匿することがない」¹¹⁾ ことであった。旧「キリスト教集会」は、それゆえ明らかに、彼らが強調していた組織性のなさのせいで、ナチ官僚の目からは「治安にとってのリスク」だと見られていたことになる。とはいえ、

10) 〔訳註〕 Hans Becker 1895-1963。法学博士として長年、ヘーシュ財閥 (Hoeschkonzern) の鉱山所長をつとめ、両大戦中は士官であった。ベッカーは「キリスト教集会」(兄弟団 Brüdergemeinde) の出身であるが、1938年の「キリスト教集会」Christliche Versammlung と「オープン・ブレザレン」Offene Brüder の和解、そしてさらに1941年、バプテスト教会と Brüdergemeinde が「福音主義自由教会同盟」へと合併したのを主導した。そして戦後その二代目の議長を約20年間つとめた。cf. *Ein Herr*, S. 340

11) »Elberfelder Zusammenkunft vom 30. Mai 1937. (Kurze Zusammenfassung der Ausführungen von Dr. Hans Becker.) Als Manuskript gedruckt«, am 10. 6. 1937 hrsg. durch Hans Becker »als Reichsbeauftragter« und die »Mitglieder des Brüderrates« (9人の連名), S. 9. それに続く評価は, Hempelmann (上掲論文), S. 44 による。

「ハンス・ベッカー博士の人格と言説については……疑念はないので、『キリスト教教会』の禁止に見舞われた国民同胞の宗教的な世話のために『自由教会的キリスト者同盟』の設立が、とりわけ、完全に国家社会主義的な世界観の上に立ち、一部は旧ナチ党員であるような、『キリスト教教会』のメンバーと共に、設立することが許可されたのである。『キリスト教教会』については、ひきつづき禁止である……。」

と、治安警察長官ハイドリヒ¹²⁾の今日ではよく知られた指令書は述べている¹³⁾。加えて、「キリスト教教会」は、他のキリスト者や「世界」、文化などに対して、意識的に距離を取った(閉鎖的な)関係を持ったがゆえに、「肯定的」とは見なされなかったのである。

新しい同盟の基本文書は次のように述べている¹⁴⁾。

1. 聖書の—キリスト教的信仰。
2. 間違いのない生の回心と、よき召命。
3. 言葉と行動における、イエス・キリストの証人になるという意志。
4. 上で説明された意味での国家肯定。
5. すべての信仰者との一致を求めて意識的に努力すること。
6. お互いの間の寛大さ。
7. この世の出来事に対する開かれた態度。

「自由教会的キリスト者同盟」BfCの新しい出発は、すべてのそこに入会しようとする者にとって、〔「キリスト教教会」の〕禁止は「なにゆえか」というはるかに困難な内的な問いに対する、ある特定の答を前提していた。それまでの、キリストの身体の一性を他の信仰者たちからの完全な垣根を作ることによって表そうとする「閉鎖的な」道を、神が審かれたのだと考えたのは、ハンス・ベッカーだけではなかった。その上、「キリスト教教会」の上へのしかかった

12) 〔訳註〕Reinhard Heydrich 1904-1942. ナチス親衛隊の中でヒムラーにつぐナンバー2の実力者で、ユダヤ人大虐殺の事実上の推進者。チェコを統治中にブラハで暗殺された。

13) Hempelmann (前掲), S. 54f. から引用。他にも BfC の設立に際しては、建物や不動産の確保が問題になった。

14) 前掲「Elberfelder Zusammenkunft», S. 10.

のは、ダービ主義的な教義¹⁵⁾の伝統の位置づけについての内的不和だった。この伝統は、年長の信徒たち、とりわけ「伝道者」Reisebrüder たちからは尊重されたが、より若い世代にとってはもはや決定的な権威を持たなかった。彼らは特別な会合において、「自由な」聖書講読のために集まっていた。しかし法学博士ハンス・ベッカーはこのいわゆる「小一時間の運動」Stündchenbewegung¹⁶⁾の本来的な「頭」であった！そして今この彼に、BfC の設立における決定的なキーマンとなる役割が与えられたのである。彼は「帝国全権委員」Reichsbeauftragter となったのであり、国家の命令に従って、地方委員に対して責任を負うこととなった。はっきりと確言されたのは、(世界、文化、芸術、政治などの完全な拒絶という意味での)「『ダービ主義』と呼ばれるものの擁護者」は、入会という観点では「見送る」べきだ、ということである。そして、「今までの振る舞いが、集会の平和の妨害者であることを推測させるような男や女は受け入れられない」。予期せぬ仕方で「獲得」された広さを、「余計なお荷物」が妨げてはならないのだ¹⁷⁾。とはいえ、「組織否定から組織絶対主義への方向転換は、集会 Gemeinde がそれを肯定するには險しすぎた」とバプテストのハンス・ルッキーが判断している (1941) のは確かに正しい¹⁸⁾。キリストの身体をより寛大に理解する備えがあるということは、しかし広い基礎の上に存在しているのである。「特別な信仰告白を持たないキリスト者」約6万人のうちわずか5-12%が、彼らが喜んでそう名乗ったように、新しい同盟に加入しなかった(「非同盟員」となった)に過ぎない¹⁹⁾。BfC は1938年12月に「福

15) 〔訳註〕 John Nelson Darby 1800-1882 は、アイルランドとイングランドで兄弟団運動 Brüderbewegung を推進し、1832年に Plymouth Brethren を創始した。彼の主張したデイスペンセーション主義、逐語靈感説、教職制の否定などをダービ主義 Darbysmus という。兄弟団運動のドイツへの進出は、ダービと、エルバーフェルトの国民学校教師 Carl Brockhaus 1822-1899 の出会いから始まっており、そのひとつの所産が、ブロックハウスの編集した Elberfelder Bibel である。cf. John Nelson Darby, Wikipedia.

16) Gerhard Jordy: *Die Brüderbewegung in Deutschland Band 2, 1900-1937*, Wuppertal 1981, S. 94-112; Friedhelm Menk: »Brüder« unter dem Hakenkreuz (前掲), S. 52ff.

17) 前掲 »Elberfelder Zusammenkunft«, S. 11.

18) Hans Luckey: Brief an A. Hoets vom 14. 2. 1941 (Oncken Archiv Hamburg).

19) 前掲 S. Hempelmann, S. 65-67; ただし前掲 Friedhelm Menk: »Brüder« unter dem Hakenkreuz, S. 85ff. は状況についてまた別の像を描いている。

音主義自由教会連合」Vereinigung evangelischer Freikirchen²⁰⁾に受け入れられた。それに先立って、BfCは——BfCの名を保持したままで——1937年の秋に「オープン・ブレザレン」Offene Brüderと、すなわち135の当時の名前で「非教会キリスト教集会」Kirchenfreie Christliche Gemeindenと再合同していた²¹⁾。「われわれの心は(90年間の分離の後に)この結束の恵みの贈物のために、感謝で一杯である」²²⁾。

「バプテスト教会同盟」Bund der Baptistengemeindenは1938年4月に、禁止が予期されていたエリム教会Elim-Gemeindenを自分の系列に受け入れていた。この教会は、ハインリヒ・ヴィーター²³⁾の指導下にあったペンテコステ系の伝道運動であり、11の大教会と19の小教会(会員数4500)からなっていた。これらは、部分的にはそのまま独立して存続し、部分的にはバプテスト教会と(一部は「伝道所」Stationenとして)合併した²⁴⁾。

20) 〔訳註〕福音主義自由教会連合 VeF は教派ではなく、ドイツの様々な自由教会のゆるやかな連合体である。1926年の発足時は、バプテスト教会同盟 Bund der Baptistengemeinden, 自由福音教会 Freie evangelische Gemeinden, 福音主義共同体 Evangelische Gemeinschaft, 監督制メソジスト教会 Bischöfliche Methodistenkirche の4教派だった。現在(2015年)は、正式参加がバプテスト、メソジスト、ペンテコステ、ヘルンフト兄弟団、メノナイトなど12教派、客員参加がセブンスデイなど3教派を数える。cf. Vereinigung evangelischer Freikirchen, Wikipedia (deut.)

21) 〔訳註〕Plymouth Brethren は、神学の違いから1848年にJohn Nelson DarbyのExclusive BrethrenとGeorge Frederick Müller 1805-1898を中心にしたOpen Brethrenに分裂していた。それがここで合同したのである。

22) Rundschreiben Kassel, den 20. August 1937; 前掲D. Boddenberg, H. Platte: *Versammlungen der »Brüder«*, S. 29.

23) 〔訳註〕Heinrich Vietheer 1883-1963。彼は敬虔主義的な共同体運動の出身で、天幕伝道やペンテコステ運動を展開した。1926年に、ハンブルクで「キリスト教会エリム」Christengemeinde Elimを設立したのを皮切りに、各地に教会をつくった。「エリム」とは、モーセに率いられたイスラエルの民が、紅海の奇跡を経てたどりついたオアシスの名前(Ex. 15, 27)である。

24) Hermann Dittert: *Wege und Wunder Gottes in der Entstehungsgeschichte der Zeltmission Berlin-Lichterfelde e.V. und deren angeschlossenen Gemeinden*, Lauter 1936. Heinrich Vietheer: *Unter der guten Hand Gottes*, Berlin 1962; *Jahrbuch des Bundes* 1938, S. 63.

1937年12月に、糸が再び縊り集められた。すなわち、洗礼志向の共同体であるバプテスト、BfC、「自由福音教会」Freie evangelische Gemeinden がより密接な結びつきを持つにいたったのである。とりわけ、常に連合志向の「オープン・ブレザレン」の代表者たちが、この連合の意図の精神的構想について強く働きかけたのである²⁵⁾。1938年5月のエルバーフェルトの会議は、「新約聖書における神のエクレシア」がテーマであったが、バプテスト及び「自由福音教会」のゲストもあって、より広い衝撃をもたらした。ヨハネ17, 20ff. の解釈は、ここでは E. Wächter (自由福音教会 FeG) によるものだったが、統一への努力という観点で、特別な重要性を持った²⁶⁾。精神的な文脈では、地域の説教者会の会合も更に議論を深めた。そこで1938年の11月には早くも「綱領」が——さしあたりは地域の教会の共生と協働のために——作り出された²⁷⁾。1939年のBfCのエルバーフェルトの教会会議は、三つの同盟の合併を目指すことを決議した。しかし必要とあらば、まだ留保すべきだとの意見が相当あった「自由福音教会」(FeG)は抜きにして、バプテストととだけ合併することもありえた。

驚くべきは、「自由福音教会」の代表者たちであった。彼らは、「監督制メソジスト教会」と(メソジスト系の)福音共同体も、つまりすべてのVeF(福音主義自由教会連合)に参加している自由教会が合併の作業に参加するべきだと考えたのである。1939年6月21日のガイスヴァイト(パトモス)²⁸⁾での会議への「自由福音教会」の招待に、人々は非常に期待して従った。しかし協議の結果は貧弱なものにとどまった。確かに人々は更に、より密接な結びつきを求めようとしたのではあるが、しかし紛れもなく、とりわけそれぞれの陣営での分

25) たとえば以下参照。Ernst Lange: *Gründe und Gegengründe für die Vereinigung der Bünde der Baptisten, Freikirchlicher Christen und Freier Evangelischer Gemeinden nach dem Vorschlag der Baptisten*, Wernigerode 1938.

26) *Die Ekklesia Gottes im Neuen Testament: Bericht über die Elberfelder Konferenz des Bundes freikirchlicher Christen (26.29. Mai 1938)*, Dillenburg (1938), S. 49ff. 統一文書の神学的基礎づけについては、この書のその他の論文をも参照。

27) Bei Boddenberg / Platte, S. 39.

28) 〔訳註〕パトモス Patmos を含むガイスヴァイト Geisweid は、現在はジーゲン Siegen の一部である。ジーゲンは、ノルトライン・ヴェストファーレン州の南東部の町で、ヘッセン州とラインラント州との三州の州境に位置する。

裂の心配が、あまりにも楽観的な期待を弱めていたのである。メソジストの監督職とバプテストの浸礼実践も、はっきり合併の妨げとして、未解決のまま残されていた。奇妙だったのは、「自由福音教会」の代表者たちが、自分たちが主導して会議に招待したにもかかわらず、かなり強く抑制的だったことである。彼らは合併を成し遂げるための「基礎」が準備できていないままに、突出して前進してしまっていた。つまり、特にヘッセン州とジーガーラントで多くの「集会」Versammlungenの「閉鎖的な」考えを克服できてなかったようなのである。

戦争の勃発²⁹⁾は、BfCとバプテスト教会同盟の相互接近を加速した。その際顧慮すべきことは、ハンス・ベッカーやその他、慣れない同盟組織の運営に携わっておりその上多くの教友たちを新しい道に向かって励まさねばならなかった人々が、次々に軍務に徴用されたために、時間がなかったということである。ハンス・ベッカーの目標設定によれば、何よりも、資料から知られるすべてによれば、いずれにせよ BfC [という形での合同] は長期的な解決ではないということであった。——バプテストの同盟指導部は次のように断言している³⁰⁾。

合併運動について注意すべきは、重要なことは神の子らの統合という大きな目標に仕えることだ、ということである。もう一つの理由は、私たちがキリスト者が困難な吟味を通り抜けていかねばならない、という認識から生まれてくる。その際すべての弱く散り散りにされた者たちは没落することだろう。それゆえ、私たちの課題は、すべての各個教会に関すること alles Gemeindemäßige を大きな統一のために、そしてそれによって大きな力のために結集することである。

1940年の終りに [BfC とバプテストの] 二つの同盟指導部は最終的な合併について審議した。もう一度 [合併の是非を] 問われた「自由福音教会同盟」Bund Freier evangelischer Gemeinden は11月末に最終的に断ってきた。

29) [訳註] 1939年9月1日にドイツ軍はポーランドに侵攻し、これに対して9月3日に英仏がドイツに宣戦を布告した。更に9月17日にはソ連がポーランドに侵攻し、ポーランドはドイツとソ連の間で分割された。第二次世界大戦の勃発である。

30) Protokoll der Bundesleitung 23./24. Oktober 1940.

少なくとも BfC の地方委員は——教会はそうでもなかったが——回状や三つの会合を通じて、事態の経過について情報を得ていた（彼らが戦場に行っていたのでなければ）のだが、他方、少なからぬバプテストの人々は情報不足を嘆いており、——第30回同盟総会の議事日程も証明しているように——「自由教会的キリスト者同盟」BfC との合併はすでに決定済みの事柄であるのを、あわたたく確認しなければならなかった。「歴史的な出来事の評価」でさえも、すでに織り込みずみのことだったのである。

「BfC から来る素朴な兄弟たちは、我々の説教者（合併会議の議長を含めてだ）よりも事態について多くのことを知っている。これは恥ずかしい状況だ」、と彼らの一人は苦情を述べた。けれども「強調したおきたいが、兄弟たちは合併に反対しているのではないし、それについて教会に同意を求められなかったことに異議を唱えているのでもない。ただ彼らは、自分たちが十分に情報を与えられなかったこと、その反対に、BfC の兄弟たちは、個別に何が眼の前で起っているか、まさに正しく事情を知っているということについて、不満だけなのだ」³¹⁾。

戦争にもかかわらず同盟総会の集まりは良く、結局のところ総じてひとつの霊的な経験となった。「参加者は皆、1941年2月22日に……二つの同盟の「福音主義自由教会同盟」への統一が決議され、参加者のすべてが霊的な一致の中で、主の犠牲死を宣教するパン裂きの際に主の食卓の周りに集まったときの、高揚した印象を忘れないだろう」³²⁾。

合併のために法的には、1936年に修正されてこのたびもう一度改正されたバプテスト教会同盟の同盟規約がベースにされている。それは現行の法人資格を危険にさらすことがないためであった³³⁾。この変化は、両者対等の新しいありように関係していた。つまりそれは、より拡大され、同時に権限をより強化さ

31) Berthold Fey の Hans Luckey に宛てた手紙 (22. 1. 1941; Oncken Archiv Hamburg)。

32) »Bundesbrief« 25. Juni 1945 (W. Vogelbusch, W. Riemenschneider の署名あり)。

33) Amtsblatt 1943 Nr. 9f. 詳細規定のない復刻は以下。J. D. Hughey (Hrsg.): *Die Baptisten. Die Kirchen in der Welt*, Band II, Stuttgart 1964, S. 275ff.; Vgl. Wiard Popkes: *Die Organisation des deutschen Baptismus von 1924 bis zum Ausgang des Zweiten Weltkrieges*, *Semesterzeitschrift* 18, 1969, S. 18-20.

れた同盟指導部であり、そして——特に微妙な点なのだが——新しい名称「福音主義自由教会同盟」Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeindenなのであった。この名称は、じゅうぶん1ダースもの別の名称が考慮される中で「勝利をさらった」ものであって、明らかに他の名称への可能性の余地を残したものであった。この名称は、たとえば「福音主義自由教会立ディアコニッセン・ムッターハウス連合」Verband der Evangelisch-Freikirchlichen Diakonissen-Mutterhäuser³⁴⁾と類似しているが、彼らは遅くとも1934年以来、この名を持っていた。バプテスト教会は、世界的によく知られたバプテストという名称を失うという「被害」をこうむったのは間違いないが、それ以前は「無名」だった(BfC)の集会は、ここでは少しばかり素敵な略称(BfC)以外、何も失わずに済んだ。パウル・シュミットと、帝国教会省の次官 Staatssekretär であったヴェルナー・ハウグの良好な関係のおかげで、名称の変更が受理されるということが確保された。案に相違して間もなく判明したことは、この合併そのものは当局の宗教政策の考え方には合わないということだった。なぜなら、「キリスト者相互の結びつきを要求しないという傾向が続いているように思われる。新しい道を進むことは、目下のところ得策ではない」³⁵⁾からである。待望の合併への認可が1年半以上待って与えられたのは、幸運な状況(代理休暇)のおかげであったと言うべきである³⁶⁾。

同盟の全体は1941年に690教会12万の信徒を抱えていた。そのうちの4万人がBfCの出身だと見積られる。同盟全体において、人々はあらゆる委員会における両派の同等性に気を配っていた。同盟事務局 Bundeshaus には、パウ

34) 〔訳註〕ディアコニッセ(奉仕女)というのは、ドイツのプロテスタント教会立の病院や福祉施設で働く看護婦に献身する女性たちのことで、ドイツ社会において伝統的に非常に尊敬される存在で、ディアコニッセンハウスと呼ばれる共同体で、共同生活をしている。EKDにも存在するが、自由教会にも100年を超えるディアコニッセの伝統があって、バプテスト系、アライアンス系、メソジスト系などが連合に加入している。現在、自由教会系のMutterhausと呼ばれる養成校が8つ、傘下の病院が39、高齢者施設が46、障害者施設9などを数える。cf. Verband Freikirchlicher Diakoniewerke e. V., Homepage.

35) Protokoll der Bundesleitung, 9. 5. 1942.

36) 1950年以降、法人資格についての付与の記録の字句内容と一緒に、年鑑に記録が印刷されている。

ル・シュミットと並んで、旧 BfC の教会の担当者としてヴェルター・フォエーゲルブッシュが入局した。ライン沿岸・ヴェストファーレン州地方連合は、BfC 教会がこの地域に特に多かったのであるが、二つに分割された。北西部連合は合併によってほぼ手つかずのまま残された。伝道旅行奉仕 Reisedienst に携わっていた BfC の兄弟たち（兵役によって妨げられない限り）³⁷⁾は、指導的なバプテストの人々によって、1941年3月のヴィーデネストでの集会³⁸⁾のうちに訪問を受けた。「悲しむ人々は幸いである」と「柔和な人々は幸いである」の間に、新しい共同の道についての報告と討議を挿入したときに、彼らはまさに「幸いの賛歌」³⁹⁾を考察することへと深められたのである。そのさい、同盟議長フリードリヒ・ロックシーは「彼の新鮮で独特なやり方」で人々の心をつかんだ。「彼は、すでに時々引用された言葉、すなわち、われわれは結婚したのであって、結婚は決して葬式ではない、という言葉を繰り返した」。彼はその語りかけを、「あなたがた伝道説教者 Reiseprediger たちはすべてのことにおいて助けになるか、それともすべてをそこなってしまうだろう」⁴⁰⁾という叫びで締めくくった。しかし伝道者たち Reisebrüder 自身が、彼らがその後すべての権利と義務を伴って、同盟の説教者リストにおいて引き受けられたことによって、救われたのである。（1942年3月31日に初めて編集された説教者謝礼のための方針、つまり最低給与は、有能な商店主が少なからずいた BfC の人々のひとつの「理想」であったが、それは——「バプテストの説教者」の目から見ると——感謝をこめて記録の余白に書きとどめられる⁴¹⁾。）

37) 〔訳註〕Brüdergemeindeは牧師制をとらないので、ここで言う「Reisedienstに携わる兄弟たちの集会」というのは、バプテストの場合の牧師会にあたる。

38) 〔訳註〕Wiedenestはラインラント地方（ノルトライン・ヴェストファーレン州）にある町の名称。現在は Bergneustadt 市の一部。現在もここには、超教派の神学校・宣教団体である Biblisch-Theologische Akademie Wiedenest (Forum Wiedenest)が活動している。この前身はオープン・プレザレン Offene Brüderによって1905年にベルリンに設立された Allianz-Bibelschule であるが、第一次大戦後の経済不況を避けて1919年にケルンの近くの Wiedenest に移転したものである。cf. Forum Wiedenest, Homepage.

39) 〔訳註〕Seligpreisungenは、マタイ福音書5章のいわゆる「山上の説教」冒頭の賛歌。

40) Bericht über die Zusammenkunft der im Reisedienst tätigen Brüder des BfC, Wiedenest vom 11.- 14. März 1941, S. 7.

41) 〔訳註〕ドイツでも自由教会は「兼牧」（別に仕事を持っていて、収入を得ながら牧会している）の牧師がかなりいる。プレザレンは牧師制をとらないので、なおさらである。しかし両派の合併は、説教者の最低給与の確保という点ではプラスに働いた。

ハンブルクのホルナー・インスティトゥート Horner Institut が1943年7月に破壊された後は⁴²⁾、[バプテストの]「説教者神学校」Predigerseminar は「ヴィーデネスト聖書神学校」Bibelschule Wiedenest に移転されて、1948年までそこに留まった。戦争末期には、スラヴ人伝道従事者を養成していた。二つの神学校の教師陣は戦争のせいで非常に数を減らしていた。しかし彼らの協働は、良き意図にもかかわらず1948年以後は続けられなかった⁴³⁾。

文献資料や参加者の報告によれば、合併運動のあらゆる局面において、人々は「神の示しと神の霊の働きに注意を払い、神の導きへの従順において行動した」⁴⁴⁾と信じたのであるが、たとい人々が多様な認識や独自性について熱心に意見交換をした⁴⁵⁾のが事実であったとしても、「宗教の対話はなされなかった」(H. Luckey)。ハンス・ルッキーとエーリヒ・ザウアー⁴⁶⁾という二人の神学者への、共通の信仰告白を起草せよという依頼は、不都合だと思われる前提の下に立っていた。「ブレザレン Brüder」の側では、これらの文書はバプテストにおけるよりもより小さな評価を受けた。そこでエーリヒ・ザウアーが、今でもオンケン文書館に残っているハンス・ルッキーのオリジナル草稿に、彼らしい

42) 〔訳註〕連合軍によるハンブルク大空襲は1943年7月24日夜から29日であった。

ハンブルク-ホルンの Horner Institut にあった神学校もこの時全面破壊されたのである。

43) 〔訳註〕後の歴史に属するが、バプテストの神学校である Predigerseminar は1948年に Hamburg-Horn に戻ったが、1997年にはベルリン近郊の Wustermark-Elstal に移って、現在は Theologische Hochschule Elstal (2003年から単科大学 Fachhochschule として認可された)として活動している。

44) Willi Riemenschneider: Der Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden. Bericht über seine Entwicklung, *Die Gemeinde* 1974, Nr. 33, 8.

45) Vgl. Hugo Hartnack: Brauchtum und Leben; Hans Luckey: Die Entstehungsgeschichte des Baptismus und der Brüderbewegung. Amtsblatt 1943, Nr. 5f und 7f und Sonderdruck. H. Luckey の論説、とりわけ *Gemeinde* 1975, Nr. 28-30.

46) 〔訳註〕Erich Sauer 1898-1959 は、ドイツのオープン・ブレザレンを代表する作家である。1920年ベルリン大学卒業の直後から Wiedenest の聖書神学校で助手 theologischer Mitarbeiter として働き、1937年からは教員 Studienleiter、1952年から没年まで校長 Leiter を務めた。そのかわり、わかりやすい救済史神学に基づく多くの著作を著し、それらは様々な言語に翻訳されて世界中でよく読まれた。しかし、ノアの三人の息子をアジア人(セム)、アフリカ人(ハム)、ヨーロッパ人(ヤフェト)に見立ててヨーロッパ人の優位を説明するような人種的偏見を含んでおり、現在、神学的にはあまり評価されていない。

聖書箇所を付け加えた。しかし何よりも、それについての助言は戦争に制約された非常に小さなグループ、つまり同盟指導部の作業部会において行われただけだった。1944年に最終的に受け入れられ、出版されたのだが、この信仰告白には明らかな「時代の痕跡」が付着していた。とりわけそれは第9項「自然の秩序について」に見られる。

戦争の関係でもうひとつ挫折したものに、バプテストにおいて長らく作業途上にあった讃美歌集を共同で完成させようという試みがある⁴⁷⁾。このために1942年に当座しのぎとしてパウル・エルnst・ルッペル⁴⁸⁾が担当した小讃美歌集 »Gemeindelieder« が出版されたが、これにはバプテストの »Glaubensstimme« , ブレザレンの独自の歌の財産、そして汲めども尽きない福音聖歌の蓄えからとられた歌が含まれていた。この讃美歌集によって、たとえば »Dem, der uns liebt« (私たちを愛するお方に) などの「ブレザレン讃美歌」が、バプテストの礼拝に入ってくる入口ができた。

「従来のバプテスト教会を従来の BfC の教会のやり方に改鑄したり、逆に従来の BfC 教会を従来のバプテスト教会のやり方に改鑄したりすること」が意図されていたわけではない。「多様性こそ財産である」からである。しかし人は、「二つの刻印づけを帯びた小さな集団が一つの場所にいる以上、それを

47) 古いケブナーの〔讃美歌集〕『信仰の声 Glaubensstimme』は、1894年にアウグスト・ラウシェンブッシュの監修の下に全面改定された。これにはそれ以来ずっと多くの福音主義に共通の歌が含まれることになった。〔訳註〕ケブナー Julius Köbner 1806-1884 は、Johann Gerhard Oncken 1800-1884, Gottfried Wilhelm Lehmann 1799-1882 と並んで、ドイツ・バプテストの草創期の三羽鳥の一人。ユダヤ教ラビの息子として生まれ、改革派の信仰覚醒運動によってハンブルクのルター派教会の信徒になっていたが、ヨハン・ゲルハルト・オンケンの宣教によって、1826年(再)バプテストを受けてバプテストの信徒になった。彼は讃美歌作者であり、キルケゴールを初めてデンマーク語からドイツ語に翻訳して紹介した文学者でもあった(青木紋子・片山寛訳「ナチス時代のドイツのバプテスト教会」(1)『西南学院大学神学論集』第72巻第1号、註26参照)。
cf. *Ein Herr*, S. 349. ラウシェンブッシュ August Rauschenbusch 1816-1899 は、在米ドイツ人のための福音主義教会の牧師として米滞在中、バプテストに転向し、(ニューヨーク州)ロチェスターの神学校で教えた。1888年からはドイツに戻り、知見の広さを生かして讃美歌集の編集をした。

48) 〔訳註〕Paul Ernst Ruppel 1913-2006 は、ドイツ・バプテスト出身の作曲家、聖歌隊指導者 Kantor。合唱曲を多く手がけている。

ひとつの共同体において統一し、生き生きと結びつけることが生存の必然性だと考えてはいた。特に、〔二つの教派間の調整について〕愛をもって書かれた勧告は、「基本原則」として〔各個教会に〕送り届けられていた。かつての BfC 教会は、「ごく当たり前の教会規則」(H・ルッキー)を入手することになった。彼らに配慮して、というのが「教会規約のひな型」である。「教会員資格は、キリストにおいて経験した救いの告白に基づいて獲得される」。バプテスマについての規約はない！(このことは戦後、バプテストの世界同盟が心配して問い合わせをする原因となった)。1944年の信仰告白もまた同じ「欠落」を含んでいる⁴⁹⁾。当時すでに、〔教会規則の〕「解説」におけるコメントが、悲しげに首をかしげさせるのである。

「いずれにしても特に考える必要があるのは、『ベテル教会』とか『ベタニヤ教会』などといった名称が維持されるべきかどうか、ということである。現代人の感情にはこれらの名称はそぐわない⁵⁰⁾。」

9. 克服されていない過去

「深いへりくだりの中で私たちは、私たちを導く神の手の下へと身をかかめる。現在の崩壊の時に眼をとめて、私たちはわが民族に、エレミヤの哀歌3章37節のことで語りかける。『主の命令なくしてそのようなことが起る、などと言うことができる者があるか』。そのように私たちは、主から目をそむけた指導者制の解体、権力者の信じられないような暴力性の暴露と除去、そして今なお私たちが民族もろとも立たされている審きを認識している。私たちを責めさいなむ問いかけと、真剣な祈りとが、神へと立ちのぼっていくのだ。」⁵¹⁾

49) »Richtlinien für die Zusammenfassung von Gemeinden verschiedener Prägung und Erkenntnis« und »Muster der Gemeindegliederung«, Amtsblatt 1943, Nr. 3; この両者は別冊としても発行された。

50) 〔訳註〕ベテルやベタニヤといった名称はヘブライ語起源であることが、ここで「現代人の感情にそぐわない」と言われることの原因。これは反ユダヤ主義的風潮への屈服である。

51) »Bundesbrief« 25. Juni 1945 (gez. W. Vogelbusch, W. Riemenschneider).

第三帝国後の同盟の最初の回状はそのような文章で始まっている。この責めさいなむ問いかけに属していたのは何よりも、個々人が、諸教会が、とりわけ同盟が、ドイツ民族がわれとわが身に負わせてしまった罪責に向き合うかどうか、そしていかに向き合うべきか、という問いであった。多くの人々が、災いの生起について自らの連帯責任——それは共なる罪責 *Mitschuld* と呼ばれた——を告白した。そして個人的な祈りと魂への配慮 *Seelsorge* において、しかしまた集められた会衆の前でも、つまりまさに同盟総会⁵²⁾ (*Velbert* 1946!) の席上で、神と人に痛切に過ちと罪責の赦しを求めて祈った。

同盟の名において、新しい同盟議長ヤーコブ・マイスター⁵³⁾は1947年にコペンハーゲンで行われた第七回バプテスト世界大会で表明した。「へりくだって私たちは、私たちの民族がすぐる年月の圧政によって自身に負わせた罪責の下に身をかがめます」。そしてハンス・ロツケル⁵⁴⁾は感動的な言葉で、この時の青年集会で告白した。

「私たちは降伏しなければならない。そして私たちは神の前で降伏するのだ。……私たちは私たちの崩壊の中に神の審きを見た。そして神の前で恵みを見出した。バプテストの青年として私たちは、どこに私たちの特別な罪責があるのかを、自らに問う。私は、仲間の青年たちの前でこれを述べたのだが、それをもう一度ここで繰り返したい。私たちはいにしへの洗礼者教団 *Täufergemeinden* の遺産をわずかにしか尊重しなかった。良心の自由、殉教死に至るほどの真理のための戦い（あらゆる暴力行使の拒絶に至る、聖霊の勝利に満ちた力への信仰）、聖なる兄弟団、万人への愛——それこ

52) 〔訳註〕同盟総会 *Bundesrat* は、*Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden* の加盟教会代議員を集めて行われる最高議決機関である。1946年の同盟総会は5月24～26日、*Velbert* で行われた。

53) 〔訳註〕*Jakob Meister* 1889-1970。ハンブルクの *Predigerseminar* で学び、*Danzig*、*Königsberg-Klapperwiese*、*Zürich* で牧会に携わった後、1935年から1956年の引退までベルリンのディアコニッセンハウス「ベテル」の監督を勤めた。そのかわり、1945年から1955年、戦後の困難な時代の同盟議長をつとめた。cf. *Ein Herr*, S. 354.

54) 〔訳註〕*Hans Johannes Rockel* 1906-1979。「ナチス時代のドイツのバプテスト教会」(1) 註 14 参照。

そが洗礼者教団における信仰の火の炎であった。私たちはこの火を消してしまった。それが私たちの罪責である。しかし神は私たちに新しい始まりを贈ってください」⁵⁵⁾。

この言葉に対立しているのは、また別の、次のような問いかけの言葉である。

「教会 Gemeinde は、もしそれが国家指導の特別な罪に対して公然と抵抗の声を上げなかったならば、全面的に罪責あるものとなるのだろうか。イエスの教会は、宣教と生きざまにおける自身の堅固な信仰のふるまいによって、ひとつの民族の没落を押しとどめることができるのだろうか。教会は、もし道徳的な力のひどい低下と、今眼前にしているような民族の深い転倒が生じたならば、共犯だとして告発されるのだろうか。我々の従来認識によれば、イエスの教会は救いの使信を宣教し具体化しなければならぬのだが、しかし民族全体を守り保護せよと依頼されてはいないし、その力もない。罪責告白が表明されるのは、誰かが神の前に立ち、自らが神の前で罪責があるとわかっている時のみである。罪責告白は、それによってキリスト者のどこかのグループにどこかで気に入られたり、あるいはどこかでどの時点かでより早く生の結びつきを見出したり、何らかの仕方仲間入りさせてもらうためにあるのではない。イエスの恵みと賜物の全てがまったく取り去られ、完全に評価しつくされてしまうわけではない、という意味での神の前での罪責は、教会は常にその罪責を引き受けなければならないだろう。なぜなら教会は確かに常に不足しているからである。しかし教会の最大の信頼によって、ひとつの民族の没落が取り消されたり、隠されたりされるかどうかは、新約聖書からは明らかではない。そのように、おそらく罪責の問題は、イエスの教会という場所においては未解決の問いであり続けている。政治的な場所にとってはどうか、またその場所において罪責問題がどう扱われるべきかについて、われわれはここで語っているのではない。

55) 二つのテキストとも、*Bundespost* 3/1947 に掲載。

以上のように、パウル・シュミットは彼の釈明報告「1941-46年における福音主義自由教会同盟としてのわれわれの道」の中で書いた⁵⁶⁾。このテキストは、それ自体もっと長い論考を要求しているのだが、ここで暗示されているのは明らかに、世界のキリスト教の代表者の前で行われ、ドイツの公衆の中で激しく議論された、1945年10月の「シュトゥットガルト罪責告白」である。歴史的な発展の文脈の中に置いたならば、パウル・シュミットの文章は、どちらかと言えば分裂した印象を残す。それは私見では、シュトゥットガルトで次のように「罪責の連帯」⁵⁷⁾を告白した告白教会の人々に、不純な動機があるという臆測が、この中に含まれているためであるが、それだけではない。

「われわれは確かに長年にわたって、ナチスの暴力支配の中にその恐るべき表現をとってきた精神に対して、イエス・キリストの御名において戦ってきた。しかしわれわれは、われわれがもっと勇敢に告白しなかったこと、もっと誠実に祈らなかつたこと、もっと喜ばしく信じなかつたこと、もっと熱烈に愛さなかつたことで、われわれ自身を弾劾する。」⁵⁸⁾

シュミットの言明の判断の中にある分裂が感動的なのは、何よりも次のことのゆえである。すなわち、第三帝国の始まる前、および始まった時点で、救済の使信の社会的・政治的な次元（「国家の良心」、「キリスト教的社会倫理に立って勧告する」）が、彼および他の人々によってはっきりと主張されていたのである。

56) Paul Schmidt: Unser Weg als Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden in den Jahren 1941-1946. Bericht an den Bundesrat in der Sitzung vom 24. - 26. Mai 1946 in Velbert, Stuttgart 1946, S. 8. [訳註] パウル・シュミットについては、「ナチス時代のドイツのバプテスト教会」(1) 註5 参照

57) [訳註] シュトゥットガルト宣言の罪責告白は、及び腰で弁解済みでいて不十分なものだという指摘は当時からあった。「罪責の連帯」という言葉もその一つである。受け取りようによっては、この言葉は、教会はヒトラーと闘ったのであり罪を犯さなかったが、国民同胞の犯した罪を「連帯」的に負ったのだ、とも読める。佐藤司郎「罪責告白と戦後ドイツ・プロテスタント教会の歩み」東北学院ヨーロッパ文化研究所 2007年、参照。

58) シュトゥットガルト罪責宣言の引用は、Hans-Walter Krumwiede u. a. (Hrsg.): *Neuzeit 2. Teil: 1870-1975 (Kirchen- und Theologiegeschichte in Quellen, IV/2)*, Neukirchen 1980, Nr. 172 による。

同じ著者(シュミット)が1947年にドイツ・アメリカのバプテストの雑誌「使者 Sendboten」に発表した次のような文章は、奇妙なことだが、シュトゥットガルト宣言の思いがけない反響を見る思いにさせる。

「たとい私たちは何一つ公開の罪責告白をしなかったとしても、そして私たちは過去に関して、或る強い宣教師的・福音的な出発と神の祝福に満ちた導きを、厳しい年月を通して振り返り見ることができるのだが、しかしたとい何らかの今日認められた、あるいは認められていない抵抗運動には属していなかったとしても、私たちはしかし次のように言いたい。すなわち私たちはそのことを私たちの神の道として見つめたのであり、今日もまだ見つめているのであり、その道のために多く祈られ、多く信じられ、多くの心中の戦いがあったのである。おそらく私たちは次のようにも言える。私たちの教会の、そして私たちの奉仕する兄弟たちの証しは、もっとも暗い時代の中でも、全力で、福音の満たしの全体において実行されたのである。私たちは私たちの民族の影の中に共に立っている。私たちは多くの起ってしまったことについての苦悩を抱えている。そして私たちは私たちの国と他の国々にとってそこから生じた厳しい結果の下に共に立っている。私たちの祈りは繰り返し、神が古き西欧に福音のたいまつを消したまわらないこと、そしてまた神が私たちの教会の証しをも、見過ごし得ないカタストロフィーの中で多くの人々にキリストに至る道を指し示すために、恵みの内に用いてくださることである。」⁵⁹⁾

「なぜ私たちは福音主義自由教会同盟として同じような信仰告白を出さなかったのか」という問いに、ハンス・ロッケル(!)は次のように答えている。

「私たちはこれまで、ドイツ福音主義教会 EKD⁶⁰⁾が世界の教会 Oekumene の代表者たちの前に立たされたと同じような立場にはいなかった。告白そのものに関して言えば、私たちの一人一人がアスムッセン⁶¹⁾のように、自分は、自分がそうすべきだっ

59) Paul Schmidt: Ein Blick durchs deutsche Bundesfenster. *Sendbote* 23. Juli 1947, S. 9 (diesen Text verdanke ich M. Bärenfänger; Hervorhebungen zugefügt; G. B.)

60) 【訳註】EKDつまりドイツ福音主義教会 Evangelische Kirche in Deutschland は、1945年、それまでのドイツ福音主義教会 Deutsche Evangelische Kirche (DEK) に代わって設立された、戦後ドイツのプロテスタント教会の連合体であり、20の州教会がこれに加盟している。

61) 【訳註】Hans Asmussen 1898-1968。ルター派の神学者で、1934年の告白教会のバルメン宣言の起草者の一人である。戦後はEKDの評議会の議長となり、Martin Niemöller 1892-1984と共にシュトゥットガルト罪責告白を起草し、世界教会の代表者たちの前で読み上げた。

たほどに固くは信ぜず、それほどに純粹には祈らず、それほどに聖なる仕方では神に献身しなかった、と告白する用意がある。……」「自由教会の本質の中には、国教会のように教会統制的な行為によって外部に向かって代表して責任をとる *vertreten* ことができるという考えはない。このことが時折、繰り返し試みられたことがあるが、それは自由教会の代表者たちによる、自分に委託されたことへの誤解であった。」「自由教会の公衆へといたる道は、自立的な個別教会の宣教を経てであり、個々の教会員の証しを経てである。しかしこの宣教とこの証しは、もし真実で信頼性のあるものであろうとするなら、神の前で正直にひざまずき悔い改めることから出てくるのである。」⁶²⁾

これは独自の仕方、1946年初めという時点で語られた、第三帝国の中での同盟の歩みを注意深く批判している言葉である。つまり、これらの言葉によって、個々人のそして個別教会の責任を指摘することを通じて、同盟の側からの公開の告白は事実として不必要だ、まして好ましくなどない、と説明されえたのである。ヤーコブ・マイスターと他ならぬハンス・ロッケルとが、上で引用された公開の告白を講演した⁶³⁾ということは、それゆえに、それだけいっそう評価されるべきであろう。二人のどちらも、厳密に言えば、同盟共同体に代わって、自分にはどうもその権限が与えられていないと感じていたかもしれない罪責告白を行った、というわけではないのだが、それでも二人は、同盟におけるひとつの職務を帯びていて、それによって少なくとも間接的には、責任者と責任を負う委員会の継続性のために告白したのである。けれども彼らは、コペンハーゲンから帰った後、そのために何人かの人々から非難されたのである⁶⁴⁾。

62) *Die Gemeinde*, 1946, S.12.

63) [訳註] この章の初めに引用されている、コペンハーゲンの第七回バプテスト世界大会での言葉。

64) 「ドイツの自由教会が1945年の後に、内輪の集会では罪責告白をしたが、公開の場所ではそれをしなかった」のは納得しがたいと考えた人の一人は、ヨハネス・シュナイダー教授であった。彼自身、自分の経歴の中で妨害を甘受しなければならなかった。というのは、ナチスの当局には、シュナイダー博士はナチス国家のためにいつでもためらいなく挺身する用意があると説明したのが認められず、むしろ彼は「告白教会の確信ある支持者」だとされたからである (laut Mitteilung der Parteizentrale, München 6. 1. 1938; Vgl. G. Balders: J. S., in: Johannes Schneider: *Das Evangelium nach Johannes* (ThHK, Sonderband), 2. A. Berlin, S. 342)。1947年に彼は同盟指導部にひとつの(罪責)宣言構想を提出したのだが、それは何ら積極的な反響を見出さなかった。この構想の中で彼は、さしあたり、第三帝国における教会と自由教会の立場の相違を説明している。それは次のようなものである。

「ここで重要なのは、誰かを指さしたり、ましてその人を裁いたりすることではない……。誰が、その当時教会や同盟で責任あった人を非難しようとするだろうか。彼らは精一杯の知識と良心に従った行動したというのに。誰が、自分たちが守りたいと

「もっとも、ひとつのことを私たちはしなかった。私たちは、無条件に告白教会の戦いと苦しみに結びつくことはせず、むしろ、自分たちの歴史と特別な委託によって示された、私たち自身の道に従ったのである。なぜなら私たちは、自らの行為においては、福音によって規定されていたのであって、自分たちの基本命題と一致しないような教会政治によっては規定されていなかったからである。そして私たちは、自分たちに与えられた課題を、神が自分たちにそのための時間と働きの可能性を与えてくださったように、長く遂行すべきだと信じたのである。

もっとも私たちは今日認識しているのだが、明らかに私たちは、事柄が起こったその時に、キリストに敵対しており犯罪的なナチス政権のやり口について立場を明らかにすべきであった。そして良心のために、意識的にまた広く開かれた態度で、神の戒めが破られたことに対して、また反キリスト的なヒトラー国家の秩序に対して、立ち向かうべきであった。私たちは大声で、その現場で、ナチス権力者の過度の不正と恥ずべき行動に対して、声を上げねばならなかった。けれども私たちはこれまでの歴史の中で、自分の判断に、公開で政治的・経済的生活の問題の中で決定的にものを言わせるという仕方では、導かれてこなかった。だから私たちは、自分たちがイエスの弟子として世界に対して有している倫理的責任性を、常に十分明らかに意識していなかったのである。

私たちは、私たちが行ったいくつかの宣言の中で過ちを犯したということをも告白する。そして自分が多くのことがらの中で、より鋭く見ていなかったこと、より勇敢に告白しなかったこと、そしてより決然と行動しなかったことを認めて打ち碎かれる。私たち、および私たちと同じく過去の年月あまりにも多く沈黙し、あまりにも少なく告白し、あるいは誤った道を歩んでしまったドイツの全てのキリスト者に、神がご自身の目に適わないことがらを負わせないでください、と私たちは祈る。なぜなら私たちは、現代における神の委託を私たちが果たすことができるのは、神の恵み深い赦しのもとに立つときのみであることを知っているからである。

そのようにして私たちは、へりくだりの霊において、自分を苦しめるすべてのものから、そして過去から自分の良心にのしかかるすべてのものから、自分を切り離す。私たちはいつか、自分たちの課題をよりはっきりと見たい。自分を主イエス・キリストによって新しく福音の奉仕へと聖別せしめ、自民族のそして全世界の兄弟たちとの共同体へと聖化せしめたい」。

〔訳註〕 Johannes Schneider 1895-1970 は、新約学者 Adolf Deißmann 1866-1937 の弟子として新約聖書、特にヨハネ福音書の研究をした。戦後になってようやくベルリン大学教授になった。彼の講座は、元来告白教会が開設したもので、ナチス時代にはナチスの妨害を逃れて Kirchliche Hochschule der Bekennenden Kirche in Dahlem に難を避けていたものである。バプテストの会員として長年 Berlin-Stegritz 教会に属し、同時にデアコニッセンハウス「ベテル」の管理運営に関わった。»Die Gemeinde nach dem Neuen Testament«, »Die Taufe im Neuen Testament«などの著作がある。cf. Johannes Schneider, Wikipedia.

願った仕事の相対的自由のために彼らが妥協したときに、彼らの味わった苦しみ葛藤を押し量ることができるだろうか。」

以上のように W. Müller は、1983年のヒトラーの政権掌握50周年に際して「1月30日への思い」という特集で述べている。彼はバプテストの領域からの上記で描写された出来事や決定や発言のいくつかに、叱責を加えている。「悲しみと恥」（それが文章の表題である）は、青年の一人であった私にとっても⁶⁵⁾、唯一可能なリアクションであるように思える。なぜならそこで重要なのは、「罪責を指摘することではなく、原因を問うことであり、自分自身の現在のために教訓を得ることだからである。そのさい人は、十把一絡げに判断してしまうことにも用心しなければならないだろう。私たちの中にも、茶色い誘惑⁶⁶⁾に呑み込まれた人々がいた。そして更にずっと多くの人々が、戦争と追放と虜囚と巨大な損害の中で茶色い独裁制の恐るべき結果を共に受けとめたときに、名状しがたい事柄を苦しんだのである」⁶⁷⁾。

この論文のはじめにすでに強調されたことだが、第三帝国における（そして第三帝国におけるのみではない）バプテストの歩みは、「同盟」の歩みと同一ではない。それどころか次の事実が存在しつづける。すなわち同盟は、最初は望まれ、次いで必要に迫られて強化された（同盟指導部や同盟本部ビル）のだが、その同盟が、公的なバプテスト像を規定したし、今日使用できる文書におけるバプテスト像を大幅に規定したということである。あの時代におけるバプテスト教会を包括的に描写するためには、もっと広い範囲の素材が、諸教会から、また個人的な記憶と証拠資料から入手されねばならない。なぜなら、第三帝国におけるバプテストの歴史は、この短いスケッチによっては、もちろん最

65) 〔訳註〕この「私」は W. Müller のことであるが、彼の生年はわからなかった。なおこの論文の筆者 Günter Balders は 1942 年生まれである。

66) 〔訳註〕初期のナチス党員は茶色の制服を着ていたため、ドイツ語で茶色 braun はナチズムを象徴する色である。

67) *Die Gemeinde*, 1983, Nr. 5 — ヨーロッパ・バプテスト連合が 1984 年にハンブルクで行われたときに、その国際会議の席上で同盟の理事長（Günter Hitzemann）が「ナチス時代についての福音主義自由教会同盟の言葉」（»Wort des Bundes Evangelischer-Freikirchlicher Gemeinden zur NS-Zeit«）を読み上げた。

もへだたった形ですら書かれていないし、とりわけ私はすでに集まった基礎資料にもとづいて書いたのだが、内容的・場所的な制約から、それ以上にさかのぼって書くことができなかつたからである。

以下のコメントは、まだ非常に断片的な仕方にとどまらなければならないのだが、しめくくりとして、いくつかの理由を考えることにしたい。

10. 解釈の試み

まず最初に、歴史的な前提条件に目をとめて、以下のことを想起したい。すなわちバプテストはヴァイマル共和国時代〔1919-33〕に到るまで、少数者の孤独を味わっていたのであり、常に「おまえたちはセクトだ」という非難につきまとわれていたということである。第三帝国においてバプテストは、思いがけないことに、部分的には他の人々の犠牲の上に、(宿命的な)価値上昇を獲得した(ベルリン1934年、オクスフォード1937年)。教会闘争に巻き込まれていたドイツ福音主義教会と一線を画したことは、苦しみ多かつた過去と当時の情勢からは理解できることである。しかし、そのように「関わりを避けた」ことは、正当化されるだろうか。(地域によっては、同盟〔本部〕の突き進んだ道筋にもかかわらず、告白教会との近い接触もまた存在していた)。

自己保存本能もまた、働いていた。(1933年:「もし自由教会が公的な生活の形成物として存在しようとするのなら、いかなる場合にも、自らをしっかりと統一のもとに統合し、新しい人々を尊重しなければならない」——ハンブルクの言葉⁶⁸⁾。

神学的な問いかけとしては、次のように議論されるであろう。もし人がバルメン宣言の「キリスト論的先鋭化」に完全には共感できなかつたとしても、なにゆえ人はローマ書13章の伝統的なルターの解釈(「自然秩序」の神学という意味で)のところに立ち止まってしまい、たとえばヨハネ黙示録を手がかりにして国家が悪魔化されうると知っている救済史観・終末史観を斥けたのだろうか

68) 〔訳註〕「ナチス時代のドイツのバプテスト教会」(1) 77頁および註7参照。

か⁶⁹⁾。バプテストの人々には（そして彼らだけではなかったのだが）、キリストの出来事をその逆説のすべてにおいて共に考慮するような歴史の神学が不足していた。それは1933年にはじめて失われたというわけではない。（このためには、聖書絶対主義的・折衷主義的な聖書使用ではまさに不十分なのである。）

バプテストの特別な「賜物」は、宣教と伝道 *Mission und Evangelisation* にあった（そして今でもそうである）。第三帝国の期間を通じてさえも伝道において起っていたすべてのことに感謝することは意味深いことである。しかし、「私たちは伝道者でありつづける」という命題は、狭隘さの危険 *Gefahr der Engführung* からはまぬがれない。幾人かの人々が当時認識していたことだが、人間の「魂の救い」のための気づかいは、「個人の救済者イエス・キリスト」を証言することに駆り立てるのみならず、安易な救いの欲求や救いの約束への警告のきっかけにもなる。シュテッティンの説教者マックス・スラヴィンスキーについて伝えられていることによれば、彼は大勢非順応的（*nonkonformistisch*）「キリストこそ救い *Heil Christus*」と挨拶の言葉を語るのが常だったという。（1940年の彼の「事故死」は、あらゆる兆候によれば、彼の告白者としての勇気と関係があるようである⁷⁰⁾。）

あまりにも内面化され彼岸化された救済理解は、時代に対する（そして悪い時代の）信仰の表明を萎縮させる。ある種、驚きで口のきけない状況はしかし、無力な沈黙につながり、しばしば周囲の振る舞いや言葉使いの規制への適応や受容へもつながる。それを定式的に言うならば、人はローマ書13章をローマ書12章抜きに持つことはできないのだ。このことは、キリスト教徒に前提されている非国教主義 *Non-konformismus* [大勢非順応主義] の観点でも（「あなたがたはこの世にならってはいけません」）、善・悪についての判断力においても（ローマ12, 2）、あてはまる。それは1984年についても、1934年についてと同じくあ

69) 〔訳註〕ルター派の神学者たちは、ローマ書13章1節「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです」に依拠しつつ、ナチスの全体主義的支配体制をも「創造の秩序」として肯定してしまう傾向が強かった。参照、宮田光雄『権威と服従——近代日本におけるローマ書十三章』新教出版社2003年。

70) Wilhelm Schmitt: Zum Tode von Dr. Max Slawinsky, *Die Gemeinde*, 1971 Nr. 41. 〔訳註〕言うまでもなく、当時は *Heil Hitler* と挨拶することが半強制されていた。

てはまるのである⁷¹⁾。

バプテストの内部経過の多くは、最終的には以下のことによって説明される。すなわち、ハンブルクの紛争⁷²⁾以来、地域教会の自立が強調されたのだが、それはある意味で振り子運動〔反作用〕として、1933年以後は、同盟〔指導部・本部〕が「自立する」という仕方をとった。たとい指導者原理の理論が最初から問題視されており、そのままでは保持されなかったとしても、同盟は、同盟指導部と同盟本部の形で「指導した」のである。時世がら、決定プロセスにおける諸教会へのフィードバックは、しかし条件付きでのみ可能だった。また同盟の責任ある人々は、その時々教会においてあるいは教会にとって困難が存在した場合には、繰り返し諸教会から援助を呼びかけられた。そのようにして、指導部の人々の倦むことを知らない努力投入のおかげで、困難な時代ではあったが、組織として驚くほど「機能的」な〔バプテスト教会 Baptistengemeindenならぬ〕「バプテスト教会」Baptisten Kirche⁷³⁾が育ったのである。この名称は歴史的には不当であるが、しかしある意味で内容的な正しさによって特徴的にこう命名したのは、メソジストの時代史家カール・ツェラーである。(〔メソジストの〕オットー・メレ司教と同盟本部長パウル・シュミットがすばらしく意気投合したのは、偶然ではない)。しかしこの「上部構造」のための教会論的な基礎づけは根本的に欠けていた(とりわけ両者を歴史的・神学的な接着剤の力を借りてつなぎ合わせようとしたハンス・ルッキーの熱心な努力にもかかわらず)。このことをとりわけ、統一された同盟のより広い道⁷⁴⁾が証明するはずである。統一

71) 1945年のVeF (Vereinigung Evangelischer Freikirchen 福音主義的自由教会連合)の最後の宣言(Karl Zehrer, Die Freikirchen und das "Dritten Reich", 1978, S. 624f.)において、ローマ書13章と共に最後のところではローマ書12章も引用されているのは、おそらく偶然ではない。

72) 〔訳註〕「ナチス時代のドイツのバプテスト教会」(1)註26参照。

73) 〔訳註〕バプテストは上位の聖職者を持つ監督制の教会ではなく、平等な各個教会主義をとるので、ドイツ語では集団名としてKircheという言葉を使用せず、複数でGemeindenと名乗るのが普通である。

74) 〔訳註〕バプテストは各個教会主義のゆえに、「同盟」が司教制のように上から支配するのを嫌う。この点では「統一」の相手の「自由教会的キリスト者同盟」Bund freikirchlicher Christen (BfC)は、Brüderbewegungの流れに立って、牧師という存在ですら置かないほどに上からの統制を嫌う、「より広い」伝統を持っていた。しかしナチズムはそうした自由教会にも「指導者原理」(「ナチス時代のバプテスト教会」(1)註24参照)を要求していたのである。

された同盟においては、「われわれの『同盟』は、あるいはそもそもひとつの同盟の設立は、聖書にかなっているのか」⁷⁵⁾という問いが収まらなかったのである。この問いの前半は、「福音主義自由教会同盟」の中にいるバプテストの人々にとっても、熟考に値いすることであった。

最後に(あるいは最初に?) 想起すべきことは、バプテストが「敬虔主義的な無知と臆病の中で」(アドルフ・ポール⁷⁶⁾) 通例は——パウル・シュミットは例外として——政治から遠ざかっていたことである。上位者という概念が人格主義的に中味を持っている限りは、これはそれほど重大な問題ではなかった。カルヴァン主義的・民主主義的な遺産をドイツのバプテストは教会 Gemeindeにおいて、つまり何よりも議決する集会としての「信徒会」Gemeindestundeにおいて持つ習わしであった。公的な生活においては、彼らは事実上 de facto、常に上位者に忠実なルター派の人々と気脈を通じていたのである。教会と国家の関係の問題においてのみ、それゆえ最も本来的な意味での宗教的な分野にお

75) 不定期に行われた Brüderkonferenz in Weidenau, März 1947 の研究報告。冊子として出版されたのは Wuppertal, Mai 1947 (著者は Hans Becker, 参照, *Bundespost* 2/1947)。

76) 〔訳註〕Adolf Pohl 1927- は、バプテストの牧師・神学者。彼の人生は、戦中・戦後のドイツ・バプテストの苦難の歴史を象徴するので、ここでぜひ紹介したい。バプテストの牧師家系の出身の彼は、ハンブルクの古典語教育で著名なヨハネウム学院でギムナジウムを終えた後、Hamburger evangelisch-lutherische Landeskirche の暫定的な講義活動(後のハンブルク大学)で1年半学び、バプテストの Predigerseminar に1947-50年に在籍した。第二次大戦中に Predigerseminar のハンブルク校舎は全壊していたため、当初は Wiedenest で、1948年から Hamburg-Horn の仮校舎で授業を受けた。1949年に、ドイツ民主共和国(DDR=東ドイツ)が建国されたが、当初は通行が自由であったので、1950年、援助要請に答えて、東ドイツ地域にあった Berlin-Lichtenburg の牧師として赴任。1957年には現場の牧会を離れて、同盟指導部(東)によって、Wort und Werk(東ドイツにおける「福音主義自由教会同盟」の月刊雑誌)の編集者に任命された。1959年に Theologisches Seminar in Buckow(東ドイツのバプテスト神学校)が設立されると、Studienleiter(教員)となり1964年からは Direktor, 1970年から1991年までは Dozent として新約聖書と教義学を教えた。ベルリンの壁ができたのが1961年であるが、それが崩壊し(1989年11月9日)ドイツが再統一した(1990年10月3日)後に、1年間だけ、母校の Theologisches Seminar in Hamburg で客員講師を勤め、1992年に引退生活に入った。多くの著作があるが、特に Wuppertaler Studienbibel の聖書註解シリーズで、マルコ福音書、ヨハネ黙示録、ローマ書、ガラテヤ書、エフェソ書を担当している。cf. Adolf Pohl, Wikipedia.

いてのみ、政治関連の表明(ケブナー⁷⁷⁾1848年)や紛争をするに至ったのである。オンケンが合衆国における奴隷問題や皇帝専制下のロシアにおける農奴制に対して態度表明し行動を起こしたからといて、彼が「ドイツの諸問題」にそれに対応する意思表示をしなかったことについて、落胆するのは間違っている。その種のことをすべてに、そしてどの場合にも期待するのは、私見では不当でもある。社会的困窮に対するオンケンのまなざしは、彼を(たとえばヴィヒャーン⁷⁸⁾とは逆に)、日曜学校にもかかわらず、最終的には社会奉仕の領域にではなく(そのような発端の仕方をしたのはようやくシェーヴェ⁷⁹⁾である)、むしろ教会 Gemeinde の領域へと強力に導いたのである⁸⁰⁾。

民主主義とは連帯責任を意味するということを、たとえばC・A・フリュッケ⁸¹⁾やパウル・シュミットのような人は認識していたし、「政治的」行為も含む行為へと移そうと試みていた。しかし多数派として支配的だったのは、教会と国家の分離は——ヴァイマルと同様手の届く近くへと移されて〔換骨奪胎されて〕——キリスト者であることと政治との分離と同義だ、という理解(誤解)であった。しかしそれによって人は、公的生活の領域を他のものと切り離して委ねてしまったのである。そして、ヴァイマルで個人的に参加しようと敢えてした数少ない人々は、独裁政治の下で、古い標語をもう一度思い知らされたのである。「政治は私事だ」⁸²⁾と。それは今日私たちが知っているように、すぐれて政治的な言明であって、その言明は同時に、多くの人々が「良き信仰にお

77) 〔訳註〕Julius Köbner については註 47 参照。1848 年、彼は「自由な原始キリスト教のドイツ民族に対する宣言」Manifest des freien Urchristentums an das deutsche Volk を発表した。Ein Herr, S. 292.

78) 〔訳註〕Johann Hinrich Wichern 1808-1881。福音主義教会(領邦教会)の神学者、社会教育者、刑務所改革者。彼は内国伝道の創始者で、25 歳の時、ハンブルクに Rauhes Haus (貧困家庭の子どもたちを寄宿舎に集めて教育)を設立した。アドヴェントにろうそくを立てる習慣は彼から始まる。cf. Johann Hinrich Wichern, Wikipedia.

79) 〔訳註〕Eduard Scheve 1836-1909。ドイツ・バプテストで最初の社会活動家。1885 年に自由教会日曜学校同盟 Freikirchliche Sonntagsschulbund 設立。続いて 1887 年には Diakonissenanstalt "Bethel" を設立し、終生この指導にあたった。Ein Herr, S. 357.

80) Vgl. hierzu Hans Luckey: Johann Gerhard Oncken und Johann Hinrich Wichern, Die Gemeinde, 1973, Nr. 34f.

81) 〔訳註〕Carl August Flügge 「ナチス時代のドイツのバプテスト教会」(1) 註 31 参照。

82) Mitarbeiter, Kassel 1933, 2.

いて」(?) 徒党を組んで行進することに寄与したのである。しかも何人かは制服姿か平服のナチス黨員として。

とはいえここは、わずかに数行で政治倫理をあれこれとスケッチするような余裕はないし、その場所でもない。(多くの人々が今日唱える対立標語「政治は教会 Gemeinde/Kirche の事柄だ」というのも、私には同じく疑わしく思える。特に、強調点が最初の言葉〔政治〕にある時にはそうだ)。しかし、御名において国家への委託を限界づけること(ローマ13, 4 善のために神に仕える召使)、そして人間に従うよりも神に従うこと(使徒5, 29)は、キリスト者であるなしにかかわらず政治的責任を受け持つ人々のために、とりなしの祈りをする(I テモテ2, 2)と並んで、キリスト教会が、たとい福音主義自由教会であっても、怠ることの出来ない、また怠ってはならない委託なのである。それは、教会がいかなる社会形式の中で生きていようと、そうである。それ以外に社会政治的な活動について我々の民主主義においてなすべきことを論じるには、また稿を改めねばならない。

願わくは、「福音主義自由教会同盟としての私たちの道」が、たとえば1984年以降の年においても、その道の上で私たちが「言葉と行為」において、自分が「真理の証人」、「平和を告げ知らせる使者」⁸³⁾であることを証明するような、そのような道であらんことを。

83) 〔訳註〕「福音主義自由教会同盟としての私たちの道」は、パウル・シュミットの著作名 Unser Weg als Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden in den Jahren 1941-1946, Bericht an den Bundesrat in der Sitzung vom 24.-26. Mai 1946 in Velbert からの引用、その後の「言葉と行為」Wort und Tat 「真理の証人」Wahrheitszeugen 「平和を告げ知らせる使者」Friedensboten はいずれも、第二次大戦中にドイツ・バプテスト同盟が発行していたが、1941年には発行停止させられた雑誌名であり、この Balders の「ドイツ・バプテスト小史」でも何度も引用されている。つまりこの最後の数行は、これらの著者や編集者へのオマージュを兼ねている。